ラテン語の系統と構造
――日本語との言語類型論的比較――

吉　田　育　馬

キーワード：ラテン語，日本語，語順，有生性，母音交替（Ablaut［独］），畳音

Ⅰ．本稿の目的

本稿は印欧語族の１言語であるラテン語の語族内での位置付けを示した上で，その構造に関して語順，有生性の問題，母音交替（アプラウト Ablaut［独］）に於いて日本語と言語類型論的な比較を試みるものである．詰まり，言語というものが系統的な違いや表面上の不一致を乗り越えて，根本的な所で共通するのであるということを示したい．

Ⅱ．ラテン語の系統

ラテン語は言う迄もなく印欧語族（インド・ヨーロッパ［印度欧羅巴］語族）に属している．西暦1786年（天明６年），印度のカルカッタに赴任していたイギリス人 Sir William Jones（1746［延享3］－1794［寛政6］）による印欧語族の着想以来 222年間ラテン語は明々白々たる印欧語族の一員である．この大言語家族は次の10のグループと独立言語に分かれた（我が説）．

新印欧語大グループ
東部方言グループ
印度・イラン語派
・印度語派　ヴェーダ語，古典梵語，パーリ語，現代印度諸語（ヒンディー語［印度共和国］，ウルドゥー語［パキスタン］，ベンガル語［バングラデッシュ］，シンハラ語［スリランカ］等）
・イラン語派　東　アヴェスタ語，パシュトー語（アフガニスタン），スキュティア語（現ウクライナ　ヘロドトス『歴史』等に記録された単語や固有名詞に残る．『歴史』第１巻106節のἐνάρης「おんな病」や第４巻59節に出て来る Ταβιτί［竈の女神］等），メディア語（紀元前８世紀，今日のイランの地に王国を建国，古代波斯語への借用語やヘロドトス『歴史』に記録された単語［第１巻110節に出て来る「犬」を意味するσπάκα 等］

に残る)

西　古代波斯語（楔形文字．紀元前 6〜4 世紀)，現代波斯語（亜剌比亜文字)

アルメニア語派　アルメニア語（紀元後 5 世紀〜　)

希臘語派　希臘語（紀元前15〜12世紀　ミュケーナイ線文字 B，紀元前 8 世紀〜　希臘文字)，

古代マケドニア語（現希臘北部．希臘古典に記された固有名詞や普通名詞に残る．アレキサンドロス大王［歴山王］の母語)

独立グループ

アルバニア語派　アルバニア語，ダーキア語（現ルーマニア）(？)

北部方言グループ

バルト・スラブ語派

・バルト語派　東　リトアニア語，ラトビア語

西　古プロシア語（現独逸から波蘭にかけてのバルト海沿岸)

・スラブ語派　東　露西亜語，白露西亜語，ウクライナ語

西　波蘭語，チェコ語，スロバキア語，ソルブ語（独逸領内)

南　古代教会スラブ語，勃牙利語，マケドニア語，セルボ・クロアチア語，スロベニア語

ゲルマン語派　東　ゴート語（紀元後 4 世紀中葉僧正 Ulfila による新約聖書の翻訳)，ヴァンダル語 (Geisericus が北阿弗利加に王国を建国)，ブルグンド語（南東仏蘭西に王国を建国．その地 Burgundia が Bourgogne の語源)

北　原ノルド語（紀元後 2〜 7 世紀のルーン文字碑文．タキトゥスの言う所の Suiones がこれにあたる)，アイスランド語，諾威語，フェーロー語（丁抹領フェーロー諸島)，瑞典語，丁抹語

西　英語，フリージア語（蘭領 Friesland 州，北西独逸 Saterland 地区，独領 Schleswig-Holstein 州西岸と北フリージア諸島）(以上アングロ・フリージア語群)，フランク語（紀元後 5 世紀にフランク王国を建国．故郷に残った低フランク語が阿蘭陀語の祖先)，阿蘭陀語，独逸語，ランゴバルド語（紀元後 6〜8 世紀に北伊太利亜に王国を建国．Lombardia 州に名残る)

古印欧語大グループ

西部方言グループ

イタリック語派　オスク・ウンブリア語群　オスク語（現南伊太利亜)，ウンブリア語（現羅馬北東の伊太利亜 Umbria 州)，パエリーグニー語，マルシー語，マッルーキーニー語，サビーニー語，ウェスティーニー語，ウォルスク語（何れも現羅馬周辺の東部及び南部)

ラテン・ファリスク語群　ファリスク語（現羅馬の北），ラテン語（紀元前 6 世紀～紀元後 5 世紀．古典期紀元前 1 世紀），ロマンス諸語（伊太利亜語，ダルマチア語［19世紀末死滅］，ルーマニア語，レト・ロマン語，仏蘭西語，プロバンス語，ガスコーニュ語，カタルーニャ語，西班牙語，ガリシア語，葡萄牙語）

ケルト語派　大陸ケルト諸語　ガリア語（紀元前 2 世紀～紀元後 4 世紀　現仏蘭西，北伊太利亜，瑞西，独領ラインラント，ベネルクス，墺太利，スロベニア），ブリタンニア語（現ブリテン島．ブリティッシュ語群に発展），ガラティア語（現土耳古中央部），レポント語（現アルプス湖水地方），ケルトイベリア語（現西班牙中央高地），ルシタニア語（現葡萄牙）

ブリティッシュ語群　ウェールズ語，コーンウォール語（18世紀末死滅），ブルトン語（仏領 Bretagne）

ゴイデリック語群　原愛蘭土語（紀元後 4～6 世紀のオガム文字碑文），愛蘭土語，スコットランド・ゲール語(英領スコットランド西北海岸，ヘブリデーズ Hebrides 諸島），マン島語（英領 Man 島で1974年［昭和49年］死滅）

独立グループ

トカラ語派　トカラ語 A，トカラ語 B(清国ジュンガル部［現中華人民共和国新疆維吾爾自治区]で 1895 年［光緒21年］に発見された中世語)

アナトリア語派　東　ヒッタイト語（紀元前17～12世紀　楔形文字　記録された最古の印欧語　土耳古共和国中央部)

西　パラー語（楔形文字），リューディア語（アルファベット　紀元前 7～4 世紀　世界初の鋳造貨幣　土耳古共和国西部），ルウィ語群（ルウィ語［楔形文字]，象形文字ルウィ語，リュキア語［アルファベット　紀元前 5～4 世紀　土耳古地中海岸]），カーリア語（アルファベット　歴史の父ヘロドトスはこのカーリア王国の首都ハリカルナッソス Ἁλικαρνασσός［現土耳古共和国 Bodrum］で生まれた　土耳古エーゲ海岸)

独立言語

プリュギア語（現土耳古共和国中央部)

トラーキア語（現勃牙利)

イリュリア語（現アルバニア，旧ユーゴスラビア)

パイオニア語（現希臘北部)

ペラスギア語（希臘の先住民．希臘語への借用語に残る)

ラエティア語（現北東伊太利亜)

ウェネト語（現伊太利亜 Veneto 州．イタリック語派か？）

リグリア語（現北西伊太利亜 Liguria 州）

メッサーピア語（現南伊太利亜　イリュリア語の方言か？）

シケル語（現伊太利亜シチリア島．イタリック語派か？）

ピクト語（現英領スコットランド．ケルト語派か？）

以上が印欧語族の詳細分類であるが，ラテン語はケルト語派とともに古印欧語大グループの中の西部方言群を形成しており，その中のイタリック語派ラテン・ファリスク語群に属する１言語である．従って，ケルト語のみならずヒッタイト語に代表されるアナトリア語派やトカラ語とともに -r に終わる受動相を持っており，ケルト語，トカラ語とともに -ā- による接続法を持っており，*-isamos, *-tamos による最上級（英語 -est，希臘語 -ιστος は印欧祖語 *-is-to-s より）や具体的な単語の形成法等の点でケルト語派に大変似ている．

斯かる事実よりこの４語派が他の印欧語と比べて構造的に古いことは間違いなく，印欧語の中の古層を形成しており，印欧祖語より早くに枝分かれしたと考えられる．またこれら４語派の中での形態論的特徴の有無により，ヒッタイト語に代表されるアナトリア語派が真っ先に枝分かれしたのは先ず間違いない．残りの３語派の中で -ā- による接続法が出来て，そのあとでトカラ語派が枝分かれした．最も長く接触していたケルト語派の人々とは最上級や具体的な単語の形成法等様々の点で共通項を有するようになったと考えるのが自然であろう．イタリック語派とケルト語派が印欧祖語から別れ出て，そのあとで印欧祖語の中で大変革が起こったのである．

詰まり，本来は非人称的役割を意味した -r 受動が廃され，-i 受動に取って代わられたと同時に，中性名詞が他動詞文の主語としても立ちやすくなり，有生類対無生類という有生性の有無による二項対立だったのが男女中という三性対立に変化した．所謂非人称受動が影を潜めたのは言う迄もない．これらに関しては次章以降で詳しく述べたい．よって構造的に新しい希臘語と構造的に古いラテン語との間には越えがたい溝があるのである．

ラテン語の有する古い特徴に関しては具体的に次のような例が挙げられる．

① -r 受動（吉田育馬 2007［平成 19］：223-227）

単数１人称　印欧 *-H_2e-r>羅 sequ-or「従う」，ガリア marcosi-or《未来》（Autun）「騎乗する」，uel-or《未来》「望む」，古愛蘭土 sech-ur「従う」，ヒッタイト eš-hahari「座っている」，リュキア si-χani「横たわっている」：希κεῖ-μαι「横たわっている」

３人称　印欧 *-to-r>羅 sequi-tur「従う」，中世ウェールズ‘ rewine-tor《未来》「破壊される」，canha-tor《未来》「歌われる」，古愛蘭土 sechi-thir「従う」，ヒッタイト ki-ttari，パラー kī-tar / kí:dar /，リュキア si-tẽni「横たわる」：希κεῖ-ται「横たわっている」

複数１人称　印欧 *-mo-r>羅 sequi-mur「従う」，古愛蘭土（fris）ˈbrude-mor（古）「困る」，（ní）ˈ

derge-mor「脇へ置かれる」：希 φερ-ό-μεθα「運ばれる」

3 人称　印欧 *-nto-r>羅 sequo-ntur「従う」，ガリア（ni）tixsī-ntor［希求法］Larzac1a7,2a4-5「(降神術によって）打つだろう」(<印欧*(s)téig^h-s-iH$_1$-nto-r)，ケルトイベリア Pī-nToŕ［非人称未来命令法］Botorrita I A10：希 φέρ-ο-νται

② -ā- 接続法

羅 fer-a-t<fer-ā-t「運ばんことを」，古愛蘭土 ˙ber-a /b´era/<原愛蘭土 *b´erāθ<ケルト祖語 *berāt，ガリア ax-ā-t /aχsa:t/ Marcellus de Bordeaux「運び込まんことを」<印欧 *H$_2$ég-s-eH$_2$-t（いずれも単数 3 人称)，メッサーピア ber-a-n(複数 3 人称)「運ばんことを」<印欧 *b^{h}ér-eH$_2$-nt：希φέρ-η-ι［単数 3 人称]，φέρ-ω-σι［複数 3 人称]「運ばんことを」

③形容詞最上級

*-isamos（<印欧 *-is-mmo-s)

羅 mā̆ximus /má:ksɪmʊs/<*mag-isamos「最も大きい，最大の」(原級 māg-nus)，ルシタニア Bletisama CIL.2-858（Salamanca)「最も幅広い」，ケルトイベリア leTaiśama /létisama:/（>西班牙 Ledesma)「最も幅広い」，ウェールズ lletaf「最も幅広い」（原級 llydan）(<印欧*plétH$_2$-is-mm-eH$_2$)，hynaf「最も古い，最古の，長老の」(原級 hen）<古ウェールズ hinham<原ウェールズ*hinihaμos（第 2 音節の i による第 1 音節の*e の i-Umlaut）<*henihamos<ケルト祖語 *sen-isamos，ガリア Belisama CIL. 13-8（Saint-Lizier)（羅馬の Minerva にあたる女神)，ブリタンニア Βελίσαμα εἴσχυσις（現イングランド Ribble 潟）プトレマイオス『地理学叙説』2.3.2（原義「最も輝ける（女神)」．羅馬の Apollōにあたる Belenus(Tertullianus *Apologeticum* 24, *Ad Nationes* 2-8, CIL.3-4774)が謂わば原級にあたる)：希ʻήδιστος「最も甘い」(原級ʻηδύς)，ヴェーダ svā́diṣṭhas「最も甘い」(原級 svādús)，英 sweetest「最も甘い」（原級 sweet)

* -tamos（<印欧*-t-mmo-s)

ルシタニア sintamom［単数対格］(Arroyo de la LuzIII)「最も古い」，ガラテイア Σένταμος，ガリア uertamaca Lezoux (Puy-de-Dôme 県)「最高の」，ウェールズ gwarthaf /gwárθav/ 頂，頂上」，eithaf「極端な」(<ケルト祖語*eχstamos)，羅 extimus「最も外の，最も遠い」，intimus「最も内部の，最も奥の，最深の」，citimus「最も近い」，ultimus「最も遠隔の，最後の」，optimus「最も良い，最良の，最善の」(原級 bonus．*ops，属格 opis，対格 opem「力，強さ，援助，助力」による最上級)

④単語形成法（吉田育馬 2007［平成 19]：223)

羅 sistit［現在単数 3 人称]「立てる，置く，立つ」，ケルトイベリア sistat Peñalba de Villastar no. 1「立つ」：ヴェーダ tiṣṭhati，英 stand，リトアニア stóju（o /o:/)

羅 fīunt［現在複数 3 人称]「成る，生ずる，起こる」，ケルトイベリア PionTi /bionti/ Botorrita A7「存在する」

羅 serunt［現在複数 3 人称]「種を蒔く，植える」，ケルトイベリア sisonTi Botorrita A7<印欧*s-i-sH$_1$-ó-nt-i（語根*seH$_1$-．*séH$_1$-men->羅 sēmen「種」，リトアニア sė̃menys［複数]，属格 sė̃menų

(語幹が n 終わり故旧子音幹．ė / e: /)「亜麻仁」，露 сéмя ,複数 семенá「種」)：英 sow
羅 datō<datōd CIL.1.2-366（Spoletium B.C.241 年よりややのち）[第 2 命令法単数 3 人称]「彼に与えしめよ」，ケルトイベリア TaTūs /datu:s/ Botorrita A8,10「彼に奉納せしめよ」

以上のような点よりラテン語はアナトリア語派，トカラ語派，ケルト語派とともに印欧語の中の古層を形成し，就中ケルト語派とは根本的な点で多々共通点を有し，この 4 語派の中で最も長く接触し，最後迄一緒にいたことがよくわかると思う．印欧祖語が話されていた地域，即ち印欧語の原郷（独 Urheimat）（北バルカンともウクライナともコーカサスとも言われる）からは恐らくケルト語派の人々と一緒に出たのだろう．そしてアルプスの北側迄は一緒に行ったのだと思われる．そこに残った人々の話していた言語がのちにケルト語になった訳であり，アルプスを越えて伊太利亜半島に入った人々が話していた言語がイタリック祖語となった．その中からラテン語とファリスク語の先祖が枝分かれし，最終的に Latium 地方に定住した人々の言語がラテン語となったのである．

Ⅲ．ラテン語の語順と有生性に纏わる問題

ラテン語の語順は典型的な OV 型で日本語とほぼ同じだが，微妙な点で日本語と異なる．基本的な語順は以下の通りである．

自動詞文　(S)　V
　　(S)　C　V　　「～は～である」等
他動詞文　(S)　O　V
　　(S) IO　DO　V　「～は～に～を与える」等
　　(S)　O　C　V　「～は～を～と看做す」等
　　副詞的要素は前に来る．

但し

・前置詞の使用．後置詞は極めて稀．mēcum「私と」，tēcum「貴方と，君と」，nōbīscum「我々と」，vōbīscum「あなた方と，君達と」，sēcum「自らと，自分と」，quōcum《単数》，quibuscum《複数》「誰と」の cum を伴った 7 つの形にほぼ限られる．
・否定辞は前に来る．
・関係代名詞は関係節の先頭に立つ．
・if，when 等にあたる，条件を表す接続詞も従属節の前に立つ．

Sī（<Sei）　S　O　V
～ば　～が　～を　～れ
Cum（<Quom）　S　O　V（cum は英語の when と全くの同源語）

～時　～が　～を　～た

〈文例〉

Deum　māximē　Mercurium　colunt.　（カエサル『ガリア戦記』第 6 巻16節）

部分属格　O　V

神々のうちで取り分けメルクリウスを（彼らは）崇める．

Hōc　proeliō　trāns　Rhēnum　nūntiātō　Suēbī　domum　revertī　coepērunt.

Prep.　N　S　方向格　O(V)　V

この 戦闘が 越えて レーヌス川を伝えられるとスウェービー族は 故郷に　戻り　始めた．

（カエサル『ガリア戦記』第 1 巻 54 節．Rhēnus　現ライン［独 Rhein］川）

詰まり，動詞文末を中心とする語順は日本語と全く同じだが，それ以外の点は近代欧羅巴諸語と全く同じである．この語順は印欧語では波斯語とほぼ全く同じであり（松本克己 2006［平成 18］：136），ヒッタイト語とケルトイベリア語は前置詞ではなく後置詞であるという点でのみ異なっているが，これが印欧祖語の語順であったと考えられ，謂わば印欧型 SOV と呼ばるべきものである．これに対し日本語の如き語順は蒙古語や満洲語と同じであり，これら諸語の属する語族の名前をとって，アルタイ型 SOV と呼ぶことが出来よう．尚ラテン語では等位接続詞の一部は繋がれる単語と単語の間に来るのではなく，繋がれる単語群の末尾或いは各単語の後に来たが，これは古代の印欧諸語全てに共通する特徴であった．

A　B-que「A と B」　A　B-ve /wɛ /「A と B」

と　或いは

〈文例〉

レポント語（現アルプス湖水地方　伊太利亜・瑞西国境地帯）

Latumārūi:　Sapsutāi:　pe:　uinom:　Našom（伊太利亜 Ornavasso 出土）

IO　IO　-que　DO(N)　(A)

ラトゥマーロスにサプスターに　と　葡萄酒をナクソス産の

「ラトゥマーロスとサプスターにナクソス（Νάξος）産の葡萄酒を(奉げる)」

（-pe はラテン語 -que に対応し，印欧祖語*k^{w}e に溯る．以下リューディア語の -k，ケルトイベリア語の -Cue /k^{w}e / も同様）（Eska&Evans1993：44，Lambert 2003：21）

リューディア語（現土耳古共和国西部）

est　mrud　eśś-k　vãnaś（Gusmani1964 no.1，旧首都 Sardes 出土）

A　N　A-que　N

この石碑が　このと　墓が

「この石碑とこの墓が」（Gusmani1964：250，大城光正・吉田和彦 1990［平成 2］：247-248, 253, 256-257）

ケルトイベリア語（現西班牙中央高地）

ToCoiTośCue:　śaŕniCioCue　śua:　ComPalCes:（西班牙 Botorrita 第 1 碑文第 1 行）

属格　　-que　属格　　-que　　名詞

Togoitom のと　Sarnicios のと　　斯くして元老院議員達が

「斯くして Togoitom と Sarnicios の元老院議員達が」

uTa:　ośCues:　PouśTomue:　　Coŕuinomue /　maCaśi[a]mue:ailamue:　　amPiTiśeTi

　　Rel.Pron.　O　　-ve　　O　　-ve　　O　　-ve　O　-ve　　V

そして誰でも　牛小屋を或いは囲いを或いは　壁を或いは　外壁を或いは　再建するように

「そして牛小屋を或いは囲いを或いは壁を或いは外壁を再建するような者は誰でも」

(西班牙 Botorrita 第１碑文第４－５行)

(Eska 1989：11，16，21，61-62，114-115，176-177，179，Pilch 2007：509-511，515-516)

この語順は日本語的観点から見ると，非常に特殊な語順であるが，上のケルトイベリア語やリューディア語の語順でもわかるように，「と」と「或いは」の位置のみならず，属格が名詞の前に来ること(所謂 GN 型．G=genitivus（羅)「属格」，N=nomen（羅)「名詞」)，関係代名詞が関係節の先頭に来ることも印欧語的な語順である．尚リューディア語では印欧祖語の*-k^{w}e を継承する -k は２番目の名詞ではなく，その名詞を修飾する，直前の形容詞にかかっているが，形容詞が名詞に対して属性的な関係にある場合，形容詞と名詞で謂わば一つの単語なので，この一つの単語の冒頭の形容詞のあとにくっつくのである．これもラテン語と同じで，印欧祖語の語順と考えられる．又ガリア語では接頭辞を伴った動詞が代名詞的目的語をとる場合，代名詞的目的語は接頭辞と動詞本体の間に挟まれ，一種の OV 型語順をとるが，これは同じケルト語派の古愛蘭土語にも見られ，印欧祖語の語順を継承していると考えられるのである．

〈文例〉

ガリア語

to-šo-kote（伊太利亜 Vercelli 出土二言語併用碑文）(Lambert 2003：68，78-80)

　O　V

それを与えた

tio-in-uōru（仏蘭西 Lozère 県 Banassac 出土陶器）(Lambert 2003：68，143)

　O　V

それを見つけた

この印欧型 SOV は現代の欧羅巴諸語にも一部生きており，独逸語では従属節に限っては SOV 語順をとるし，仏蘭西語でも人称代名詞と指示代名詞の出て来る文ではこの語順が保存されている．

〈文例〉

仏蘭西語

Je　t’aime.

S　O　V

私は君を愛する.

Je　lui　offre　un　livre.

S　IO　V　DO

私は彼に贈る　本を「私は彼に本を贈る.」

このOV型の語順は複合語にも反映され，それは次のようなコントラストより理解しうる.

ラテン語	agri-cola「農夫」	trium-vir「三頭官」	Ahēno-barbus（男性名）
	O　V	G　N	A　N
	畑を耕す	三人の内の一人の男	青銅の髭をした
日本語	山登り	鱈子	赤髭
	yama-nobori	tara-ko	aka-hige
	O　V	G　N	A　N
漢語	登山		
	V O		

これは欧羅巴中世の文法家が名付けるところのrectum（羅）（支配されるもの）がregens（羅）（支配するもの）に先行する，rectum→regensなる形のprogressive rection（前進的支配）で，これがOV型言語の基本原理なのである．ただ実際にはラテン語では属格或いは形容詞と名詞の位置関係はGNでもNGでも良く，ANでもNAでも良かったが，複合語には嘗ての語順が保存されており，これは他の古い印欧語でも同様であるので(上述のケルトイベリア語でも「牛小屋」はPouśTomで，Pou-は「牛」，-śTomはラテン語のstāre「立つ」と同根で，「小屋」を意味するので，「牛の小屋」でGN型である.古代ルーマニアのダーキア語でも同様.吉田育馬2008［平成20］：81を参照.Pulpu-dēva［>Plovdiv勃牙利領］は「ピリッポスの町」でGN型等)，印欧祖語の語順は明らかにOV型であったと推定することが出来るのである．反対に漢語，即ち中国語では文章上の語順もVO型であるが，複合語も矢張りVO型であり，regens←rectumなるregressive　rection（後退的支配）の原理によって律せられている．rectumとregensの具体的な構成要素は以下の通りである（松本2006［平成18］：129-130，169-176）.

	rectum	regens
(1)	連用修飾語	動詞
	目的語	
	補語	
	副詞	
(2)	連体修飾語	名詞
	属格	
	形容詞	
	連体句（関係節）	

⑶　比較対象語　　比較形容詞

⑷　動詞　　助動詞的成分

⑸　名詞　　接置詞（前置詞/後置詞）

詰まり，ラテン語は可也整合的なOV型であったろうと考えられる印欧祖語の語順を継承しており，属格や形容詞みたいに名詞の前でもあとでもどちらでもよいような場合でも複合語では本来の語順，即ちGN型とAN型が保存されているのである．「と」と「或いは」の位置や否定辞，関係代名詞，条件を表す接続詞の位置に至る迄他の古代の印欧語と見事に対応し，印欧祖語の語順を完璧に継承しているのである．これらの点に於いては日本語とは異なるものの，目的語や属格や形容詞の位置関係，動詞と助動詞的成分の位置関係等の点に於いては日本語と全く同じであり，いずれも前進的支配の原理原則に基づいて動いているのである．そしてそれは表面上は異なるものの，有生性に於いても同様であった．

ラテン語ではbonus(m.)，bona(f.)，bonum(n.)型の形容詞を除き，名詞類は全て男性と女性が同じ語尾をとり,中性だけが異なっていて，鋭く対立しているが(弁別上のちに区別を付けたācer（m.)，ācris(f.)「鋭い，苛烈な，熱烈な」型の形容詞を除く)，これは有生類（男性・女性)：無生類（中性）という有生性に基づく二項対立が形態論上存在していたのである．

第一曲用　agricola(m.)「農夫」，toga(f.)「トガ（羅馬市民の平和時の寛衣)」

第二曲用　equus(m.)「馬」，fāgus(f.)「橅」：ōvum(n.)「卵」

第三曲用　i-音幹　āxis(m.)「車軸」，vestis(f.)「衣服，衣」：mare(n.)「海」

子音幹　honōs(m.)「名誉，誉」，arbōs(f.)「樹木，木」：genus(n.)「生まれ，種属，家門，種類」

Catō(m.)(男性名)，virgō(f.)「処女，乙女」：termen(n.)「境標，境石」

patēr(m.)(古形)「父」，mātēr(f.)（古形)「母」：cadāver(n.)「屍，死体」

第四曲用　portus(m.)「港」，quercus(f.)「柏の木」：genū(n.)「膝」

詰まり，ラテン語は形態論上希臘語等よりも遙かに二性組織であって，この点に於いてヒッタイト語を初めとするアナトリア語派と完全に軌を一にするが，これが印欧語本来の組織であった．第Ⅱ章の系統論でも述べたように，ラテン語は印欧祖語の古層を形成しており，早くに印欧祖語から別れ出たと考えられるのである．

実際にラテン語では中性名詞は自動詞文の主語には立つが，他動詞文の主語（行為者）には立ちにくく，主格（「～が/は」主語を表す）と対格（「～を」目的語を表す）は同じ形をとるが，これは他の全ての印欧諸語でも同様で，就中ヒッタイト語では中性名詞は絶対に他動詞文の主語（行為者）にはならなかった（松本2006［平成18]：55)．即ち無生物は行為者にはなりえなかった訳で，統語論上も有生類（男性・女性)：無生類（中性）たる有生性に基づく二項対立があったのである．この点に於いてもラテン語を含む古代印欧語は日本語と軌を一にする．詰まり，日本語では複数語尾「～達　－tači」は生物，取り分け動物にはつきやすいが（例：狐達 kitsune-tači，山鼠達 yamane-

tači，虫達 muši-tači)，無生物にはつきにくい（石達 iši-tači??，鉄達 tetsu-tači???)．存在動詞「いる iru」と「ある aru」の区別も原則「いる」が動物主語，「ある」が非動物主語であり，有生性に基づいている（例：「山鼠が 7 匹いる」vs.「3 里西に高い山がある」)．またラテン語では acinus　(m.)「漿果（苺・葡萄の類)」の複数形に acina(n.pl.)，iocus(m.)「冗談」の複数形に ioca(n.pl.)，locus (m.)「場所，所」の複数形に loca(n.pl.) がある等単数形では男性なのに，複数形になると中性になるという一群の名詞があるが，これらはいずれも集合数的複数であり(例えば上例の acina（n.pl.) だと 1 株になっている苺や葡萄の 1 房を指すのである)，中性の複数が男性や女性に見られる本来の複数とは異なっているというのがよく分かると思う(吉田育馬 1999 [平成 11]：56, 2005 [平成17]：129)．詰まり，中性だけがカテゴリー的にはういているのである．有生性とは少し関係がないが，日本語にも並行的現象が見られ，「～達　－tači」や「～ら　－ra」とは些か異なり，「山々 yama-yama」，「木々 ki-gi」，「星星 hoši-boši」，「島々 šima-žima」といった畳音複数は任意の複数の山や木や星を表すのではなく，一連のもの，一塊のものを表しており，一種の集合数的複数なのである．

要するにラテン語を含む古代印欧諸語でも日本語でも生物か無生物かということが非常に重要な訳で，中性名詞は構文上次の位置に現われた．

	*-os	*-om		
他動詞文	S	O	V	印欧 *-o-s（男・女性単数主格）>羅 -os> -us
自動詞文	S		V	印欧 *-o-m（中性単数主対格，男・女性単数対格）>羅 -om> -um
	*-om			

即ち他動詞文の主語である行為者には有生物（男性・女性）しか立たず，統語論上も形態論上も行為者である有生物だけがういている．特に，上例でも示されている第二曲用では目的語は印欧祖語では*-o-m の形でしか現われなかった．詰まり，有生物か無生物かに関係なく非能動的な目的語の位置では同じ形をとった訳であり，ここに印欧語が動態：静態の対立で動いているというのがよく分かるのである．だから非能動的な中性名詞では主語（自動詞文にしか立たない）の位置でも目的語の位置でも同じ形をとった，即ち主格と対格が同形となったのである．形態論上も行為者である有生物だけがういている構文のことを能格型というが，印欧語の場合は動態：静態の対立で動いているので，より正確には動格型と言うべきだろう（松本 2006 [平成 18]：297-298)．

この動態：静態の対立は名詞のみならず，動詞にも見られた．ラテン語の受動相は本来は能動相に対する静的な状態を表した訳で，自動詞でも単数 3 人称と不定法に限り受動相をとることが出来るという，所謂非人称受動というのがその最たるものであった．

〈文例〉

vīvitur ex raptō.「(人々は) 掠奪によって生きている．」（オウィディウス『変身物語』第 1 歌144行)

ab conciliō discēditur.「散会する（人々が会議より立ち去る)．」（カエサル『ガリア戦記』第 7 巻 2 節)

これらはいずれも第三活用の自動詞 vīvō，-ere「生きる」，discēdō，-ere「立ち去る」の受動相現在単数 3 人称であるが，前者では「生きる」即ち「生計を立てる」という行為が行われている

という状態を表しており，後者では正に「立ち去る」という行為の真っ最中であるということが示されているのである．日本語や（印欧語の中での）現代語的な意味での受動ではないけれども，行為が行われているという“状態”を表しているという点では普通の受動と同じであり，これが印欧語本来の，謂わば父祖伝来の受動なのであった．ラテン語には印欧語の中でも古層に属するシンタックスが保存されているのである．尚この両動詞に出て来る-tur という受動相単数３人称語尾の末尾の -r は本来は非人称的な状態相を表していたのではないかと考えられ（ラテン語の完了複数３人称語尾で俗語的古形の -ēre と同一起源であると思われる），第Ⅱ章の系統のコーナーでも述べたようにアナトリア語派とトカラ語派とケルト語派にしか見られない非常に（異常に）古い特徴であり，形態論的にも印欧語の古層に溯るものなのである．結局印欧祖語からこの４語派が抜け出たあとで,動態：静態のシステムは崩壊に向かい,-r 受動は能動相現在からの類推によって-i 受動に取って代わられ（希臘語等を参照．ゲルマン語でもルーン文字碑文の原ノルド語では haitē《受動現在単数１人称》(丁抹領 Fyn 島 Kragehul 出土の槍の柄．紀元後300年頃)（Antonsen1975：35-36《no.15》）「私は呼ばれる」なる形に -i 受動が保存されている．即ち -ē<ゲルマン祖語 *-ai<印欧祖語 *-H_2e-i)，名詞に於いても有生類（男女性)：無生類（中性）の二性組織が男性：女性：中性という三性組織に取って代わられた．印欧語本来のシステムは以下のようであった．

	動態	静態
名詞	有生類(男性・女性)	無生類(中性)
動詞	現在・アオリスト(単純過去)	完了
	能動相	受動相

Ⅳ．母音交替（アプラウト Ablaut［独］）

英語の sing-sang-sung「歌う」，come-came-come「来る」，run-ran-run「走る」（a で過去を表す）や sing「歌う」：song「歌」,bind「縛る」：band「紐，帯」(a>o で名詞を表す.song<ゲルマン祖語*sáŋγ^{w}iz <印欧祖語*sóŋg^{wh}-i-s~*soŋg^{wh}-éH_2>希臘祖語*hoŋk^{wh}ā́>*oŋk^{wh}ā́>ホメーロス ’oμφή「歌」）のようにラテン語を含む印欧語には母音交替なる現象があり，様々な機能を表した．ラテン語には次のようなものがあった．

①動詞単数(e)：複数（ø）

現在単数３人称　es-t　‘is’　　接続法現在単数２人称　s-iē-s

　　複数３人称　s-unt　　複数２人称　s-ī-tis

‘BE’

②動詞現在(e)：s-完了　(ē)

現在単数１人称　reg-ō　　teg-ō　　veh-ō

完了単数１人称　rēx-ī　　tēx-ī　　vēx-ī（x /ks/）

「治める」「覆う」「運ぶ」

③主格延長の有無による単数主格（長母音）：(短母音)

単数主格	pēs	Cer-ēs	(ē)	arb-ōs	(ō)	Apoll-ō		(ō)	car-ō	(ō)
属格	ped-is	Cer-er-is	(e)	arb-or-is	(o)	Apoll-in-ī《与格》<Apol-en-ē		(e)	car-n-is	(ø)
	「足」(穀物の女神)			「木」		「アポッロー」			「肉」	

単数主格	pa-tēr>pa-ter	mā-tēr>mā-ter	(ē)
属格	pa-tr-is	mā-tr-is	(ø)
	「父」	「母」	

④語根名詞（e)：行為者名詞（o)

語根名詞　prec-ēs(f.)《複数》「祈り」

行為者名詞　proc-us(m.)　「求婚者」

⑤動詞（e)；名詞（o)

動詞　teg-ō　「覆う」

名詞　tog-a(f.)「トガ」：ウェールズ to「屋根」，英 thatch「(屋根の）葺き藁，草［萱・藁］屋根」(印欧*o>ゲルマン a)

⑥比較級に纏わるもの

ma-iōr-em《比較級男女性単数対格》「より大きい」(原級 māg-nus）(ō)

ma-ius《比較級中性単数主対格》<*majjos<*mag-jos　(o)

ma-ies-tās「尊厳」　(e)

mag-is「寧ろ」　(ø)

詰まり，e~o~ø~ē~ōという母音交替をラテン語は行なっていた訳であり，上述の如くこれらはそれぞれ機能を担っていた．この母音交替は父祖伝来のもの，即ち印欧祖語に迄溯り，形式も全く同じであった．同様に我が日本語にも a~o を初めとして様々な母音交替がある．

〈日本語の母音交替〉

①複合語形（a)：独立形（e)：動詞（o)

ma-bataku（目－はたく)「瞬く」，ma-buta「瞼」，ma-do（目－戸)「窓」，ma-doromu「まどろむ」，ma-moru（目－守る)「守る」，ma-tataku（目－叩く)「瞬く」，ma-na-ko（目－の－子)「眼」，ma-na-zaši「眼差し」，ma-na-žiri（目－の－尻)「眦」～me「目」～ma-mo-ru「守る」～mi-ru「見る」

ta-dzuna「手綱」，ta-motsu（手－持つ)「保つ」，ta-mukeru「手向ける」～te「手」～to-ru「取る」

ama-do「雨戸」, ama-gasa「雨傘」, ama-mori「雨漏り」～ame「雨」～haru-same「春雨」, kiri-same「霧雨」，ko-same「小雨」

kaga-mi（影－見)「鏡」，kaga-ri-bi「篝火」，kaga-yaku（影－焼く)「輝く」～kage「影」

saka-ba「酒場」，saka-daru「酒樽」，saka-dzuki「盃」，saka-mori「酒盛り」，saka-ta「酒田」，saka-

ya「酒屋」～sake「酒」

②複合語形（o）：独立形（i）

ho-bašira「火柱」，ho-kage「火影」，ho-taru（火－垂）「螢」，ho-teru「火照る」，honoo<po-no-po（8世紀）（火－の－穂）「炎」～hi「火」

ko-dači「木立ち」，ko-dama「木霊」，ko-garaši「木枯らし」，ko-kage「木陰」，ko-more-bi（木－漏れ－火）「木漏れ日」，ko-no-ha「木の葉」，ko-no-mi「木の実」～ki「木」

③複合語形（a）：独立形（o）

kura-gari「暗がり」，kura-yami「暗闇」～kuro「黒」

šira-ga「白髪」，šira-iši「白石」，šira-saka「白坂」，šira-taki「白瀧」，šira-uo「白魚」～širo「白」

④動作（a）：結果・状態（o）（松本 1995［平成 7］：58-59）

動作	hasa-mu「挟む」	hira-ku「開く」	kata-ru「語る」	kusa-ru「腐る」
結果・状態	hoso-i「細い」	hiro-i「広い」	koto-ba「言葉」	kuso「糞」
動作	muka-u「向かう」	nada-meru「宥める」	šina-ru「撓る」	
結果・状態	muko「婿，聟」	nodo-ka「長閑」	šino「篠」	

⑤属格 na~no

a-na-ta「貴方」，ka-na-ta「彼方」，ma-na-ko「眼」，ma-na-zaši「眼差し」，ma-na-žiri「眦」，sa-na-gara（そ－の－柄）「さながら」，ta-na-be「田邉」，ta-na-gokoro（手－の－心）「掌」，taka-na-wa「高輪」，wata-na-be「渡辺」，mi-na-to（水－の－戸）「港」～honoo<po-no-po（8世紀）（火－の－穂）「炎」，ko-no-ha「木の葉」，ko-no-mi「木の実」，ko-no「この」，so-no「その」，o-no「己」，o-no-re「己」（a-na-ta「貴方」，ka-na-ta「彼方」の-ta は to-ko-ro「所」の to-の母音交替形）

⑥動詞間，動詞－名詞間派生

kar-u「刈る」（a）～kir-u「切る」（i）～kur-u「刳る」（u）～ki-kor-i（ki-「木」）「樵」（o）

ya「矢」（a）～*yi-ru>iru「射る」（i）

⑦倍数法

hito「1」～ɸuta「2」　mi「3」～mu「6」　yo「4」～ya「8」（i（小）～u（大），o（小）～a（大））

⑧その他

ⅰ）a~o 交替

a-re「あれ」，a-na-ta「貴方」～o-no「己」，o-no-re「己」

aga-meru「崇める」，aga-ru「上がる」～ogo-ru「驕る」

ara-i「粗い」，ara-ta「新た」～oro-ka「愚か」

asa-i「浅い」～oso-i「遅い」

hata「端」～hoto-ri「畔」

hita-muki「直向き」，hita-sura「ひたすら」～hito「一」

ka「日」（mi-kka「3日」，yo-kka「4日」，itsu-ka「5日」等）～ko-yomi（日－読み）「暦」

ka-re「彼」，ka-na-ta「彼方」～ko-no「この」，ko-re「これ」

kama「蒲」～komo「菰」（菰池，菰原等の人名に）

kata「片」～koto-naru（片－成る）「異なる」

ma-natsu「真夏」，ma-naka「真中」～mo-naka「最中」

na「名」～na-no-ru「名乗る」，no-ri-to「祝詞」

sa-hodo「左程」，sa-na-gara「さながら」～so-no「その」，so-re「それ」

a-na-ta「貴方」，ka-na-ta「彼方」，ai-da「間」～to-ko-ro「所」，ya-do（夜－所）「宿」

take「丈，岳」，taka-i「高い」～toko「床」

tawa-meru「撓める」～too<towo（古典語形）「10」（両手の指を全て撓めることによって「10」数えたので）

ⅱ）u~i 交替（松本 1995［平成 7］：23-24）

kamu-kura「神座」～kami「神」

kutsu-wa（口－輪）「轡」～kuči「口」

mu-kuro「骸」，mu-ne「胸」～mi「身」

tsuku-yomi-no-mikoto「月読命」～tsuki「月」

utsu-ro「空ろ，虚ろ」～uči「内」

hito-tsu「1 つ」，ɸuta-tsu「2 つ」～hata-či「二十歳」

ⅲ）o~i 交替

nog-areru「遁れる」～nig-eru「逃げる」

oko-ru「怒る」～ika-ru「怒る」

ⅳ）a~e 交替（松本 1995［平成 7］：18-19）

ka-mi「髪」，šira-ga「白髪」～ke「毛」

ha-ta「端」（端切れ ha-gire），a-na-ta「貴方」，ka-na-ta「彼方」～omo-te「表」（omo「面」cf.面影）

以上概観したように日本語はラテン語を含む古代印欧語と同じくらい大規模に母音交替を行ない，然もジャンル的にも多岐に亙っている．これは嘗て日本語に於いてもラテン語を含む古代印欧語同様母音交替が重要な役割を担っていたことを示唆している．

Ⅴ．畳音（羅 reduplicatio，英 reduplication）

前章では母音交替に就いて可也詳しく概観したが，これ以外にもラテン語と日本語を特徴付ける共通のものとして畳音という現象がある．これは読んで字の如くで，「音を畳みかける」という意味であり，同じ音が完全に或いは部分的に繰り返される現象である（例：きらきら，ぴかぴか，たまたま，明々白々等）．近代欧州語には極めて少ないので，日本語だけの現象であるかの如くに

思われがちであるが，英語の beaver や独逸語の Biber「ビーバー」はそれぞれ英語 brown，独逸語 braun「茶色い」の部分的畳音形であり，元々の意味は「茶色い奴」ということであった．因みにこれはユリウス・カエサル Gaius Iulius Caesar（B.C.100.7.13―B.C.44.3.15）の『ガリア戦記』第１巻23節以下にも出て来る Aedui 族の城市 Bibracte（現仏領 Mont Beuvray）やラテン語の fiber，対格 fibrum「海狸」と全くの同源である．英語の do の過去形の did や阿蘭陀語の doen の過去形の deed「した，やった，行なった」も古代ケルト語の一種であるレポント語の TeTu /dedu:/（伊太利亜領アルプス湖水地方 Vergiate 出土．Lambert 2003：21-22，吉田育馬 2007［平成 19］：230，232-233）と同源で，部分畳音であった．ラテン語や日本語には次のようなものがあった．

ラテン語

ｉ）完全畳音

barbarus「野蛮な，外国の，異国の，未熟な，粗野な」(希臘語 βάρβαρος と同源)

murmur「絶えず呟くこと，ぶつぶつ［ぶんぶん（蜂が）］言うこと」

ラテン語ではこれは極めて少なかった.希臘語に於いては比較的多く見られるが,完全畳音の一部は印度イラン語派に保存された強意活用を模しているものと思われる(吉田育馬 1999［平成 11］：51-69)

ii）部分畳音

①畳音部母音 i 型

〈名詞・形容詞〉

Cicerō,　属格 -ōnis「キケロ」cf. cārus「高価な，貴重な，愛すべき」

fiber，属格 fibrī「海狸」(独 Biber，英 beaver，ガリア Bibracte と同源)

titulus「上書き，表題，碑銘，書名」cf. tollō, -ere「上げる，高める，掲げる」

〈動詞現在形〉

bibō，-ere「飲む，酒宴を催す」<IE.*p-í-pH_3-o-H_2，単３ -e(-t)-i>ヴェーダ píbati，古愛 ibid「飲む」cf. pōtus, -ūs「飲むこと，飲酒，酒浸り」，pōculum「盃」

gignō, -ere「産む，生ずる」(希臘語γίγνομαιと同源）cf, genus, -eris「種属，出生，家門，種類」

sistō「立てる，置く，建てる，立つ」(ケルトイベリア語 sistat［現在単 3］と同源）cf. stō, stāre「立っている」，stāmen, minis「たて糸，織物，おしべ」

sīdō, -ere「座る，腰掛ける」<IE.*s-í-zd-o-H_2，単 3-e(-t)-i>ヴェーダ sī́ḍati cf. sedeō, -ēre「座る，座っている」(語根部の s が d の前で消えて直前の母音 i が音の長さの調節のため長くなる)

②畳音部母音 e 型

〈形容詞〉

memor「思い出の，記憶している」

〈動詞完了形〉

meminī 「思い出す，記憶している」(この動詞は完了しかない．希臘語 μέμονα「熱望している」)
cf. mēns, mentis「知性，理解，思考」，moneō, -ēre「思い出させる，警告する」
cecinī 「歌った」(古期愛蘭土語 cechain) ←canō, -ere「歌う」
dedī 「与えた」(ガリア語δεδε 仏蘭西 Bouches-du-Rhône 県 Orgon 出土) ←dō, dare「与える」
stetī 「立った」←stō, stāre「立っている」
tetigī 「触った，触れた」(ホメーロス希臘語 τεταγών [アオリスト分詞]) ←tangō, -ere [n- 接中辞現在]「触る」

上に見るようにラテン語の畳音の形式は甚だはっきりしている．完全畳音はそのまま重ねるので兎も角，部分畳音ははっきりと 2 つのタイプに分かれる．2 つとも印欧祖語に遡る，即ち父祖伝来のタイプであり，名詞や形容詞の畳音というのはそれぞれ動詞の畳音現在や畳音完了に准えて作られたものであるというのがよく分かるのである．

畳音現在の場合は語根部が零階梯であり，畳音部は語根の最初の子音に i を加えるという方法で作られているが，名詞の場合にも同様のパターンがあるのである．分かり易い例で言うと，「海狸」を意味する fiber は単数属格では fibrī，同対格では fibrum であり，語根部は明らかに零階梯をとっている．語根部の子音と畳音部の子音が異なっているが，これは本来は$*b^h$ であり，語頭では$*p^h$ を経て f に成ったが，語中で然も共鳴音 r の前では有声性が維持され，*βを経て b と成ったのである．ただ畳音部の母音は矢張り i をとっており，畳音現在動詞と軌を一にしている．細かい証明をやり出すときりがなくなるので，この辺りでやめるが，あとの 2 つも同一パターンに拠って作られている．

畳音完了の場合も語根部の最初の子音が畳音部に来るという点では同じであるが，畳音部の母音は e であった．形容詞の memor はこれと全く同じタイプなのである．ただ語根部の母音が o であるが，これは完了形は本来語根部に o をとったからである．希臘語の δέρκομαι「見る，はっきりと見る，注視する」の完了形は δέδορκα「注視している」であり，πείθομαι「納得して意に従う，言うことを聞く」の完了形は πέποιθα「信を置く，頼みとする，恃む」，γίγνομαι「生まれる，生ずる，起こる」の完了形は γέγονα「生まれている，起こってしまった」と基本的には o 階梯であった．

日本語

ｉ）完全畳音

①擬音語，擬態語ほか

bata-bata　バタバタ
gira-gira　ギラギラ
kira-kira　キラキラ

piči-piči　ピチピチ

pika-pika　ピカピカ

ori-ori　折々

toki-doki　時々

本来現代の大和言葉には存在しない語頭の p（恐らく奈良時代，即ち西暦紀元後 8 世紀迄は存在した．ハ行音がそうであった）が出て来たり，無生音が爽やかなさらさらしたものを指すのに対し，有声音がそうでないより汚いものを指す等独特の特徴がある．後分の語頭は連濁をともなうこともある．

②集合数的複数

hi-bi　日々

hito-bito　人々

hoši-boši　星星

ki-gi　木々

šima-žima　島々

yama-yama　山々

③双数（羅 dualis）

či-či<ti-ti　乳

ho-ho　頬

mi-mi　耳

mo-mo　腿

④幼児語（指小詞的機能）（松本 2007［平成 19］：162）

o-me-me　お目目

o-te-te　お手手

či-či<ti-ti　父

ha-ha<ɸa-ɸa（16世紀）<pa-pa（8 世紀）母

後 2 者は本来恐らく幼児語で，言語習得の際可也早くに習得され，幼児語としても用いられやすい p，t といった最も基本的な閉鎖音が用いられたのだろう．

⑤強調・描写的副詞（松本 2007［平成 19］：162）

aka-aka　赤々

ao-ao　青々

karu-garu　軽々

kuro-guro　黒々

⑥動詞反復・継続（松本 2007［平成 19］：162-163）

kaesu-gaesu　返す返す

kawaru-gawaru　代わる代わる

miru-miru　見る見る

naku-naku　泣く泣く

yuku-yuku　行く行く

ⅱ）部分畳音

ta-tazumu　佇む←tatsu　立つ

to-domaru　とどまる←tomaru　止まる，泊まる，留まる

以上が日本語の畳音であるが，ラテン語を初めとする印欧語との決定的な違いは完全畳音の方が圧倒的に多いということである．ただ畳音の意味合いは色々とあって，一番頻繁に用いられるのは擬音語・擬態語ではあるが，幼児語であったり，強調・描写的副詞を作ったり，動詞で反復・継続を表したり（松本 2007［平成19］：162-163），集合数的複数を表したり（印欧語ならば中性複数で表される．吉田育馬 1999［平成11］：56，2005［平成17］：129 を参照），極僅かであり，身体名称に限られはするが，双数も表した．乳にしても頬にしても耳にしても腿にしても体の両側にあり，対になっているという点で双数を表す手段としての畳音が用いられたのは極自然な流れであった．畳音の使われ方は印欧語とは決定的に異なり，然も印欧語では現代語では勿論のこと，比較的多く用いられた古代語でも日本語を中心とする環日本海諸語（ギリヤーク語，アイヌ語，日本語，朝鮮語）や漢語と比べて数も少なく，用法も極めて局限されていた（松本 2007［平成 19］：165-168）．ラテン語を初めとする印欧語は現在を表す i-加音型畳音と完了を表す e-加音型畳音に分かれていた訳であり，印欧語の場合は過去の行為の結果としての現在の状態を表す，一種の状態相，即ち静態としての完了と，謂わば一種の動態としての現在というアスペクトの違いのみが甚だ重要であった．尚日本語にも非常に局限されてはいるが，部分畳音があり，第 1 音節をそのまま重ねた．連濁を伴うこともあったが，この点に於いては印欧語と共通している．系統は明らかに違えども，同じやり方であるというのは人類言語としての本質であろう．

Ⅵ．総纏め

以上ラテン語の系統と印欧語内での位置付け，日本語との類型論的な比較を通じての語順と有生性，母音交替，畳音に纏わる問題を可也詳しく論じたが，OV 型語順や有生性に基づく様々な点や母音交替による機能の弁別，発想は違えども畳音が存在して様々な機能を持っているということ等の点でラテン語を含む古代印欧語は日本語と軌を一にし，言語というのはたとえ系統は違えども，同じような発想や原理原則によって動いていることもあるのである．

参考文献

Antonsen, Elmer H. 1975 *A Concise Grammar of the Older Runic Inscriptions* Max Niemeyer Verlag（Tübingen）

Eska, Joseph E. 1989 *Towards an Interpretation of the Hispano-Celtic Inscription of Botorrita*（Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft 59）Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck

Eska, Joseph E. &Evans, D. Ellis 1993 'Continental Celtic' in Martin J.Ball（ed.）*The Celtic Languages* Routledge（London & New York）pp.26-63

Godley, A. D.（ed.）1926 *Herodotus I* Books I -II（Loeb Classical Library 117）Harvard University Press（Cambridge, Massachusetts）

1938 *Herodotus II* Books III-IV（Loeb Classical Library 118）Harvard University Press（Cambridge, Massachusetts）

Gusmani, Roberto 1964 *Lydisches Wörterbuch* Carl Winter Universitäts Verlag（Heidelberg）

Lambert, Pierre-Yves 2003 *La langue gauloise* éditions errance（Paris）

松本克己 1995（平成 7）『古代日本語母音論　上代特殊仮名遣の再解釈』（ひつじ研究叢書（言語学編）第 4 巻）ひつじ書房（東京都千代田区）

2006（平成18）『世界言語への視座―歴史言語学と言語類型論―』三省堂（東京都千代田区）

2007（平成19）『世界言語の中の日本語―日本語系統論の新たな地平―』三省堂（東京都千代田区）

大城光正・吉田和彦1990（平成 2）『印欧アナトリア諸語概説』大學書林（東京都文京区）

Pilch, Herbert 2007 *Die keltischen Sprachen und Literaturen* Universitätsverlag Winter（Heidelberg）

Stückelberger, Alfred & Graβhoff, Gerd（hrsg.）2006 *Ptolemaios Handbuch der Geographie* 1.Teilband Einleitung und Buch 1-4 Schwabe Verlag（Basel）

吉田育馬 1999（平成11）「古代ギリシア語における畳音式名詞の現れとその印欧語的解析」(筑波大学一般・応用言語学研究室『言語学論叢』第17号 51-69頁)

2005（平成17）「ローマ時代ヒスパニアのケルトイベリア語の名詞曲用について」(学習院大学ドイツ文学会『研究論集』9 川口洋教授・下宮忠雄教授古稀記念特集 117-137頁)

2007（平成19）「大陸ケルト諸語動詞形態論―特にラテン語との比較―」(明治学院大学教養教育センター付属研究所『カルチュール』第 4 号［伊藤千秋教授定年記念号］216-235頁)

2008（平成20）「古代ルーマニアのダーキア語に就いての覚書」(桜美林大学『桜美林論集』第35号 75-88頁)